

故高乗勲氏蔵『草庵和歌集』考

三 村 晃 功

一 はじめに

文保二年（一一三一）正月の和歌所御会始に、浄弁・慶運らと出席、元応二年（一一三〇）七月には、二条為世から古今伝授を受けたともいわれ（『伝心集』）、同年同月完成奏覧された『続千載集』に一首入集して、次第に歌僧としての名声も高まり、鎌倉末期には浄弁・慶運・兼好らとともに為世門の和歌四天王と称されるにいたった頼阿の私家集『草庵和歌集』（以下『草庵集』と略称）は、成立以降、歌風について、一時冷泉派の今川了俊・正徹などによって批判を蒙る時期はあったが、二条派和歌が漸次、公家・武士・僧侶たちの主流をしめるにいたると、その後は、江戸時代にいたるまで、頼阿の和歌は圧倒的な評価と影響を及ぼし、ことに江戸初期の堂上派歌人に、題詠歌の手本として格別に尊重されたことは、周知の事柄であろう。

その頼阿の家集『草庵集』については、稲田利徳氏の著書があり、その「第二章 頼阿の家集研究」（『和歌四天王の研究』平成一一・二、笠間書院）に委細をつくした研究があつて、きわめて有益である。すなわち、稲田氏は『草庵集』の伝本三十四本を対象に考察を進め、詞書・配列・歌本文などの異同結果を総合して、各系統本（第四

類に分類)の性格について整理、要約されたが、『草庵集』の伝本は、以上紹介した以外にも、個人蔵のもの、寺院蔵のものの存在を数本知っているが、閲覧の機会が得られないので、ここでは触れることはできない。」と、当該伝本調査の残されている現況を吐露されている。

このような『草庵集』の伝本研究の現況のなか、筆者はこのたび、故高乗勲氏蔵の『草庵集』の伝本を閲覧する機会を得ることができ、早速、詳細な調査を試みたところ、該本は『草庵集』の伝本のうち、かなり貴重な伝本であることが判明した。このようなわけで、ここに拙稿を公表することにした次第であるが、大方の厳しいご批評が得られるならば、幸甚である。

なお、拙稿は種々の面で、稲田氏のご論考に負うところが多く、氏から蒙った学恩に対し、深謝申し上げる次第である。

二 書誌的概要と収載歌の問題

さて、故高乗勲氏蔵の『草庵集』について、書誌の概要に言及するならば、おおよそ次のとおりである。

縦二十六・三センチ、横二十・三センチ。袋綴。写本二冊。表紙は絹地に、亀甲のなかに花模様を配している。題簽はなし。内題は「草庵和歌集巻第二」(一七)。一面十一行書きで、和歌一首一行書き。本文料紙は楮紙で、胡紛引き。見返しは金箔型押し。墨付きは上冊(巻一、巻六)七十八丁、下冊(第七、第十)六十二丁。遊紙は上下各冊に、前後各一丁。室町最末期から江戸初期の書写か。桐箱(縦二十八・二センチ、横二十二・五センチ)があり、上箱に「(別筆で)堂上方御筆／草庵和歌集 二冊」と記す。奥書はないが、巻末の

半丁に「近衛殿道一嗣 公御作（近衛殿御書）／竊視世（此）集之輯編可謂和歌之規範彰（顕）意／氣（なし）於萬象之中垂風軀於千載之後誠是／此道之遺美也豈不斯文（久）在茲乎不足嗟嘆／聯（斯）吟情（情性）而已／としへぬる和哥のうら人みかけはそ／あつむる玉のかすつもるらん」（承応二年版本で校合）と記す。

以上が故高乗勲氏蔵の『草庵集』（以下「高乗本」と呼ぶ）の書誌的概要だが、次に、高乗本の内容について、承応二年版本（新編国歌大観所収）と書陵部本（五二・一一、私家集大成所収）とを参看しながら言及すると、（表一）のとおりである。

（表一）『草庵集』の歌数比較対照表

伝本 部立	春上	春下	夏	秋上	秋下	冬	恋上	恋下	雑
高乗本	一二〇	一二八	一六六	一二三	一二四	一七一	一四七	一三五	一四六
版本	一二〇	一二八	一六五	一二六	一二四	一七四	一四七	一三四	一四七
書陵部本	一二一	一二七	一六六	一二四	一二四	一七四	一四四	一三五	一四七
伝本 部立	合 計								
高乗本	一七〇	一四三〇							
版本	一八一	一四四六							
書陵部本	一八一	一四四三							

この（表一）をみると、高乗本の歌数がかなり少ないことが判明するが、ここで歌数の視点から、伝本間の特徴を明らかにするために、三本間に共通する歌の出入りに関係する詠歌を列举してみよう。

- A なにはかたほのかにたてるみをつくしふかき霞のしるしとそみる
(海辺霞を・四六)
- B 梅か香はさたかに匂ふ木の間よりもみえす霞月かな
(書陵部本、月前梅・七〇)
- C 夕くれは花の外なるかねの音も匂ふはかりに山かせそふく
(夕花・一五二)
- D ほのかなるたゝ一声も時鳥なをおもひての在明のそら
(御子左大納言家句十首に・二九五)
- E ははそ原いく田のをの秋風に山路こえきて鹿のなくらん
(版本、野鹿・四九五)
- F かきりなき空もしられてふしのねの煙のうへにいつる月影
(書陵部本、独吟百首に・五一二)
- G たえだえに影ぞやどれる露ながら月や木のまを森の下草(版本、後花山院内大臣家五首、月花草花・五三九)
- H 冬の池につかはぬをしはをのれさへ氷の床によかれすらしも
(書陵部本、夜水鳥・七三二)
- I をしかものうきねの床の枕よりあとよりこほる冬のいけ水(同、二条大納言家一日百首に、池水鳥・七三四)
- J 比良のうみはたかねの影やうつるらんあとなき波にふれる白雪
(同、湖雪・七九六)
- K 音にたにたてそかねぬるあふことは夏の、おきのしけきおもひは
(民部卿家にて、夏恋・八六七)
- L 露ふかき萩の上葉のかせたにも音きくにのみぬる、袖かは
(聞声恋・八六八)
- M いまさらに色にやいてんおもひ草野へのおはなのもとのこゝろを
(民部卿家百首に、寄思草恋・八七〇)
- N ひとりぬる遠山とりの契たにかさなるみねをへたてやはする
(民部卿家百首に、隔遠路恋・一〇一七)
- O なにはかた雲の夕ある波の上にとをきいこまの山そのこれる
(書陵部本、なにはにてよみ侍し・一一二三)
- P うたかたのうかひやすると中河の水のこゝろにまかせてそみる
(同、返し・一三二三)
- Q なきかけのたちやそひけんことししもふかきにかへるわか浦浪

(同、民部卿、勅撰うけ給なから奏覧をと けすしてかくれられ侍しに、延文元年七月三十三年にあたり侍しも、新千載集仰下され侍しかは、仏事の次に人々歌よみ侍しに、懷旧の心を・一三五五)

R 山人のおのにこたへしむかしこそ我たつそまのはしめなりけれ

(同、比叡山の中堂にまうて、思ひつ、けゝる・一三七四)

S さりともとわたす御法をたのむ哉あし分小舟さはりある身に

(同、弥陀本願の心を・一三七五)

T にしへゆく御法の門をたつぬれはもとのさとの宮こなりけり

(同、聖護院五十首に、釈教・一三七六)

U にしにこそつゐに入なれ法の道かりにあまたの門はあれとも

(同、門々見仏後生浄土・一三七七)

V 西へ行みちよりほかはいまの世にうき世をいつる門やなからん

(同、安樂集、唯有浄土一門可通路・一三七八)

W 露の身のまたきえぬより心こそ花のうてなまつやとりけれ

(同、普観の心を・一三七九)

X としをへてすますしるしもなかりけり野中のし水本の心は

(同、識揚神飛親難成就・一三八〇)

Y 後の世の花のうてなをたのむ身はまつ木のもとそすみかなりけり

(同、釈教の歌中に・一三八一)

Z この葉もおよはぬ法の道しはをこゝろのほかはたれにとはま

(同、同・一三八二)

以上の二十六首が、三本間で収載の有無の点で異同の認められる詠歌だが、その点を整理したのが、次頁の(表2)である。

この(表2)をみると、高乗本は版本と符合する場合もあれば、書陵部本とも符合する場合もあって、高乗本のみが収載する独自の詠歌はないことが判明する。ちなみに、R・Zの九首は連続する歌群であるので、高乗本が依拠した伝本を書写する際に、丁移りか何かのために、ついうっかり犯した書写ミスと考慮されようから、元来は存していた詠歌と推測されよう。なぜなら、Rの詞書の「比叡山の中堂にまうて、思ひつ、けゝる」が、高乗本では、

(表2) 詠歌収載状況一覧表

書陵部本	版本	高乗本	伝本 記号
○	×	○	A
○	○	×	B
×	○	○	C
○	×	○	D
×	○	×	E
○	○	×	F
×	○	×	G
○	○	×	H
○	○	×	I
○	○	×	J
×	○	○	K
×	○	○	L
×	○	○	M
○	×	○	N
○	○	×	O
○	○	×	P
○	○	×	Q
○	○	×	R

書陵部本	版本	高乗本	伝本 記号
○	○	×	S
○	○	×	T
○	○	×	U
○	○	×	V
○	○	×	W
○	○	×	X
○	○	×	Y
○	○	×	Z

1 うき身とも今はなけかしとく法にあふはあたる契ならねは

(二三七〇)

の1の詠に付され、1の詠には、書陵部本によれば「源中納言よませられし十首歌に、聴法述懐」の詞書が付されて、その間にRゝZの九首が連続して配列されるという構成になっているからである。したがって、RゝZの九首は当面、検討対象から除外して考察を進めて差し支えないことを意味しよう。

そこで改めて、AゝQの十七首の三本間における出入りについて検討を加えてみると、版本・書陵本がともに収録しながら、高乗本のみが未収載のB・F・H・I・J・O・P・Qの八首のうち、HとOの二首が何故に収載されていないのか、その理由は分明でないけれども、Qの詠は、RゝZの詠歌とまったく同様の事例であって、実は、Qの詠に示した詞書は、高乗本ではQの詠歌ではなくて、

2 と、めをく跡をもしらて友千鳥いかなるかたのうらにすむらん

(二三五二)

の2の詠歌に付せられているからである。ちなみに、2の詠の詞書は、版本・書陵部本とも、「此道も心さしふかく侍し藤原宗基、三善顕尚、為宗、身まかりて後、はしめて新千載集に名を残侍るをみて」(書陵部本)となっている。

次に、FとHとJの三首を高乗本が収載していないのは、Fの場合「月前梅」(実際は「夜梅」の例歌となっている)、Hの場合「夜水鳥」、Jの場合「湖雪」の題歌が各々、二首掲げられていた関係で、各々、一首欠落して未収録になった背景が推測されよう。それが高乗本の書写者の賢しらによる結果なのか、ケアレス・ミスによる結果なのか、その理由は分明でないが、憶測を逞しうすれば、後者の可能性が強いのではなからうか。

また、IとPの場合は、IとPの直前の詠歌が、各々、

3 をし鳥の床もさためぬうきねして枕なかる、冬のいけ水

(贈左大臣家三首に・七三二)

4 うたかたのきえにし跡もいまさらにむせひやまさる中川の水

(いみの日かすすきて人々かへ

られし後、母儀於京極旧跡にのこられ侍るよしき、て民部卿へ于時宰相中将へのもとへ申侍し・一三三〇)

の3・4の詠のとおりであつて、Iの場合は、直前歌の初句が「をし鳥の」であつたために、Iの初句の「をし」のもの」の措辞との類似性でIの詠を欠落したと、また、Pの場合は、直前歌もIの歌もともに初句が同じ「うたかたの」の措辞であつたために、高乗本の書写者が目移りによつて、うっかり欠落したと考慮されるのではあるまいか。となると、理由が不分明であるとしたFとOの場合も、憶測を逞しうするならば、あるいは高乗本の書写者の

ケアレス・ミスの可能性もなしとしないであろう。

以上の検討から、結局、高乗本が『草庵集』の原初形態の祖本ではなく、換言すれば、高乗本から版本・書陵部本などへの伝播経路の可能性は、たとえば、R→Zの歌群の欠落や、Qの詠に付された詞書が実は2の詠の詞書であった誤謬の事例などから、ほとんどないと言わざるを得ないであろう。となると、残されたA・C・D・E・G・K・L・M・Nの九首の検討から、高乗本は、C・K・L・Mの四首については版本の、A・D・E・G・Nの五首については書陵部本の影響を各々、受けている、所謂、取り合わせ本の性格を持つ伝本と規定されるであろう。

ちなみに、この結論を、稲田氏の前掲著書の『『草庵和歌集』伝本考』（以下、稲田氏論考と呼ぶ）を参照して、どの系統本と符合するかを検討してみると、十二本の伝本と一致するが、稲田氏自身が二本以上の伝本に認められる和歌の有無を整理した「第I表」（稲田氏論考のなかの表を意味する。以下同じ）によって、この九首以外の歌の出入りを検すると、高乗本は第三類の第一種本「東奥義塾図書館本」、同第八種本「東京大学総合図書館本」、同九種本「竜門文庫本」と符合することが知られる。なお、冬部以下を欠く伝本ではあるが、第一類の第四種本「静嘉堂文庫本」とも、秋部下までの範囲では符合している。この収載歌の有無の視点から導き出された結論は、はたしてこのほかの視点からの検討によっても実証されるのであろうか。次に、和歌の配列の視点から、この問題に言及してみよう。

三 和歌の配列の問題

そこで、高乗本を、和歌の配列の視点から、版本・書陵部本と比較してみると、十五例ほどの異同を指摘するこ

とができる。そのうち、ここでは二例をあげて、この問題を考えてみよう。

その第一例は春部下に認められもので、高乗本は、

A かつちるもさかぬもあれとけふしこそなへてさくらのさかりなりけれ

(青蓮院入道二品親王家三首に、花盛開・一四七)

B わけきつる遠山すりのかり衣ころもへにけるはなのかけかな

(民部卿家山王講のついでに、遠尋花といふことを・一四八)

のA・Bの詠歌が連続し、つづいて、

C 春をへてはなに人めののこらすはしかのふるさと猶やあれなん

(故郷花・一四九)

のCの詠以下、次の

D いつよりも花をそみつるこの春は月の比しもさくをまちえて

(親王家三首に、月前花・一七九)

のDの詠までの三十一首が連続して、さらに、

E おぼろなるかけともみえさく花の梢にうつる春の夜の月

(将軍家五首に、月照花・一八〇)

のEの詠以下、次の

F おしからぬ身をいたつらにすてしより花を心にまかせてそみる（聖護院二品法親王家五十首、見花・一八七）

のFの詠までの八首が接続するという配列になっている。

この高乗本の配列構成と同じ伝本が書陵部本であるのに対し、版本では、AとBの間にEからFの歌群が挿入されるという配列になっている。この書陵部本と版本の間に認められる異同について、稲田氏は「この異同は、編者などの意図的なものではなく、書写の際、あるいは合綴のとき、錯簡などによって生じたものかもしれない。」として、書陵部本の「配列が本来のもので、版本系はなにか錯簡などで生じたものではないか」と憶測されているが、筆者も、この異同は稲田氏の言われるとおりだと考える。その理由は、この箇所は本来なら、高乗本のごとき配列であって、EからFの八首をDの詠に連続させるべきであったのに、偶然、Dの詠の詞書が「青蓮院入道二品親王家三首に、月前花」であったので、版本系の編者は「青蓮院入道二品親王家三首に、花盛開」などと、Dの詞書とはば同様の内容の詞書を持つAの詠に、うっかり連続させてしまったと考慮されるからである。

その第二例は秋部上に指摘しうるもので、高乗本は、

G 霧ふかき山のこかけにきこゆなりくる、もまたぬさをしかの声（霧中鹿・四八二）

H 夕つく日いりぬるあとはをくら山まつふくかせに鹿そなくなる（二条入道大納言家三首、暮山鹿・四八三）

I うつろふを秋の色とよときは山夕日のかげにしかのなくらむ（新日吉社三首に、夕鹿・四八四）

J 秋の田のかりほのこ萩さきしよりくる、日ことに鹿そ鳴くなる

(藤原基任よませ侍し五首に、田家夕鹿・四八五)

のG・Kの配列構成になっている。ところが、書陵部本はG・I・H・Jの配列であるのに対し、版本はI・G・H・Jのごとくで、いずれも高乗本とは符合をみない。そこで三本間の異同について検討してみると、実は、高乗本はHとIの詠に付された詞書に問題があることが判明する。すなわち、版本・書陵部本の詞書を参照すると、高乗本の詞書には、HとIの内容が反対に付せられているのだ。ということは、高乗本も元来は、Iの詠にHの詞書が、Hの詠にIの詞書が各々、付せられるはずであったと推測されるので、この箇所は書陵部本と同様の配列構成であったと考えられる。

このほか、和歌の配列の観点から、稲田氏が二本の伝本に共通する配列異同を整理された「第Ⅳ」を参照して、高乗本と符合する伝本を探してみると、完全に一致する伝本は見出しえない。ただし、高乗本の六三六・六三八の異同の例外を除くならば、高乗本は、第三類本系の諸本と多分に共通する性格を持つ、第一類本の第四種本「静嘉堂文庫本」(和歌の欠落は除く)と符合する。

四 詞書の問題

次に、詞書の観点から、高乗本の特徴を探ってみよう。そこで、版本・書陵部本も参看して詞書に固有名詞の出てくる事例を、高乗本から任意に選び、掲げてみよう。

春たつ心を

A 朝かすみたなひきにけり敷嶋のたかまと山に春や立らん

(一)

將軍家三首、雪中鶯

B ふる雪のあしたの原に聞ゆなりはるをたとらぬうくひすの声

(一〇)

故郷鶯

C 風さへて猶しら雪はふるさとのみかきか原にうくひすそなく

(一五)

寂真よませ侍し哥に、若菜

D いくにかわかなつまゝしかすみたつかすかの野へもみ雪ふるなり

(二六)

民部少輔大夫氏経家にて哥よみ侍しに、早春氷

E 山川の水のしらなみよくは又たちかへりこほるころかな

(三六)

後光明照院前関白家にて、山霞

F たかねには嵐吹こすほとみえてふもとはれぬ朝かすみ哉

(三七)

このAからFの詠に付された詞書を、版本・書陵部のそれと比較してみると、次のような異同が指摘される。

A ○「春たつ心を」 ×「二条入道大納言家十首、春たつ心を」

B ○「將軍家三首、雪中鶯」 ×「等持院贈左大臣家二首、雪中鶯」

C ○「故郷鶯」 ×「法印浄弁許にて、題をさくりて歌よみ侍しに、故郷鶯を」

D ○「寂真よませ侍し哥に、若菜」 ×「若菜」

E ○「民部少輔大夫氏経家にて哥よみ侍しに、早春氷」 △「民部少輔氏経家にて歌よみ侍しに、早春氷」

×「修理大夫氏頼家にて歌よみ侍りしに、早春氷」
 F ○「後光明照院前関白家にて、山霞」 X「山霞」

この詞書についての異同を整理、一覧したのが、次の（表3）である。

（表3）詞書の内容異同一覧表

書陵部本	版本	高乗本	伝本 記号
×	○	○	A
×	○	○	B
×	○	○	C
×	○	○	D
×	△	○	E
○	×	○	F

この（表3）をみると、高乗本は、A・B・C・Dでは版本と一致する一方、Fでは書陵部本と符合をみて、混合形態の様相を呈している。ところで、Eの場合、固有名詞の「氏経」では版本と一致しているので、基本的には、高乗本は版本系に依拠している背景が類推されよう。ただ、職階を「民部少輔大夫」と記述している点で版本と異同するが、この高乗本の記述は、憶測を逞しうすれば、書陵部本系の「修理大夫」の「大夫」を取り込んだものと推測されようから、高乗本は書陵部本にも依拠して詞書が記された可能性を否定しないであろう。

ただし、春部上においてAにみられる「二条（入道）大納言」と「前藤大納言」との異同を調べてみると、高乗本は完全に第一類本と一致するので、詞書が版本系の伝本によって記述されたことは疑いえないであろう。ちなみに、稲田氏が作成された春部上における、二本の伝本に共通する詞書の異同を一覧した「第Ⅱ表」によれば、Fの

例外を除くならば、高乗本は第一類本の第四種本「静嘉堂文庫本」と一致する。

なお、蛇足ながら、春部上以外の全巻に及ぶ詞書の異同を、稲田氏の作成になる「第Ⅲ表」を参看して検討してみると、高乗本は次に示す二例の例外を除くならば、第二類本の第一種本「国立公文書館内閣文庫本」(三九六の詞書は内閣本が詠歌を欠いているので、不問に付す)と一致している。その二例の例外とは、次の

元亨の比、源大納言家詩哥合、春曉

G あくるまのかすみにまかふ山のはをいて、夜ふかき月の影哉

(一一二)

真宗院兼空上人をとつれ侍つゐてに

H まれにみし人めもいまはむかしにて野となりはつるふか草のさと

(一一八三)

のGとHの詠に付せられた詞書で、いま、そのGとHの異同をみると、

G ○「元亨の比、源大納言家詩哥合(に)、春曉(月)」 ×「源大納言家詩歌合に、春曉月」

H ○「真宗院兼空上人をとつれ侍つゐてに」 ×「兼空上人をとつれ侍る次に」

のとおりで、内閣文庫本はいずれも、「×」に示したごとく高乗本と異同している。前者が「元亨の比」、後者が「真宗院」の記述を欠くために、高乗本と異同するわけだが、稲田氏の論考によると、前者は後人の「補充の可能性」、後者は第二類本の「誤脱」の可能性もなしとしない由である。

いずれにせよ、詞書の視点からいえば、高乗本は、第一類本の第四種本「静嘉堂文庫本」と第二類本の第一種本

「国立公文書館内閣文庫本」に近い伝本といえようか。

五 和歌本文の問題（その一）

次に、和歌本文の視点から、高乗本の性格を検討してみよう。以下の任意に掲げる事例は、高乗本独自の措辞である。

A さくらさく色もにほひもあらはれてあくると山に春風そふく

（御子左大納言家四季百首に・一三七）

B 天川なを雲とちてみしかよのあくるをおしむ五月雨の空

（暁五月雨・三三八）

C 我さへにいつとはいはぬちきりかなかねて人めの隙をしらねは

（忍契恋・九五〇）

すなわち、A・Bの初句は版本・書陵部本とも各々、「桜花」、「天（あま）の戸は」であり、Cの初句は版本が「我まつと」、書陵部本が「われにさへ」のとおりで、高乗本のみ独自の表現となっている。この点、高乗本は第一類本とも第三類本とも性格を異にする伝本の可能性を示唆するが、この問題を、稲田氏作成の書陵部本を基本にすえ、それに対立する本文異同を示した「第V表」を参照して検討すると、高乗本は春部上から秋部下までの範囲では、二例の例外を除くならば、第三類本の第七種本「国立国会図書館本」と同第八種本「東京大学総合図書館本」と符合する。その例外の二例とは、

D 志賀のうらやかすむ浪まにかへるなり水にかすかく鴈の一つら

(独吟百首に・九六)

E 露ふかきみちのしは草うつろひてふるき都は衣うつなり

(秋歌中に・六一一)

のD・Eの詠歌で、Dでは高乗本の初句「志賀の浦や」が「こしの海の」(第三類)・「志賀の浦の」(第一類)と、Eでは高乗本の初句「露ふかき」(第三類)が「露さむみ」(例外)・「露さむき」(第一類・第三類)・「露ふかみ」(例外)などと異同している。このうち、Eについては、第一類本と第三類本の間に混同がみられ、諸本間に揺れが指摘されるが、Dの場合は、間投助詞の「や」に異同があるが、高乗本の措辞は基本的には第一類本とみなされようから、何故に高乗本に第一類本の措辞が認められるのか、合理的な説明はむづかしいと言わねばならない。

次に、同じく稲田氏作成の「第V表」によると、冬部から神祇(雑部下に相当する)までの範囲では、高乗本は四例の例外を除くならば、第一類本の第三種本「豊橋市立図書館本」と符合する。その四例とは、次の

F 風ふけはたかしの浜のあたなみをつはさにかけて鳴衛かな

(金蓮寺哥合に・七四〇)

G たかゝたにまつ夜ふけぬとうらむらむきてはほとなくおきわかる共(贈左大臣家三首に、不通夜恋・九九四)

H はかなくや玉のをにせむかたいとのこなたかなたにかくる契を

(御子左大納言家東山なる所にて哥よまれしに、寄玉恋・一〇一四)

I みかきけるこの玉のみそ和哥のうらのむかしをうつす光とはみる(新千載集えらはれ侍し時、いたし侍し哥を、弾正宮より御覧すへきよしおほせこと侍しほとにまいらせたりしを、返給し時つゝみかみに・一二三二)

のF・G・H・Iの四首である。このうち、Fでは高乗本の結句の「鳴衛かな」(第二類・第三類)の措辞が第一

類本では「千鳥なくなり」とあり、Gでは高乗本の初句の「たか、たに」（全系統）の措辞が一部の伝本では「たかために」（第一類の一本・第三類の一部）とあり、Hでは高乗本の結句の「かくる契を」（第一類の一本・第三類の一部）の措辞が第三類の一本以外は「かくる心を」（全系統）とあり、Iでは高乗本の下句の一部の「うつす光とはみる」（第一類・第三類の一部）の措辞がそのほかの伝本では「かへすひかりとはみる」（第三類）・「うつすひかりなりけり」（第一類の一本）・「のこすひかりとはみる」（第一類の一本・第三類の一部）・「うつす鏡なりける」（第二類・第三類の一本）のように、各々異文を持っている。

このうち、Fの場合のみは、第三類本のすべての措辞と異同して、一類本のすべての措辞と符合している事例で、高乗本の性格を明確に示している（Iの場合も、基本的にはFの事例に属しよう）が、G・Hの場合は、ほんの少数の例外的異同であって、諸本間の異同にそれほど神経質になる必要はないのかもしれない。ともあれ、この四例を除けば、高乗本は冬部以下の範囲では、第一類本の第三種本「豊橋市立図書館本」と符合しているわけである。

ちなみに、本文異同の視点からいえば、高乗本には、依拠した伝本が二種類あることになるが、この問題については、春部上から秋部下までは上冊に、冬部以下は下冊に各々、関係する事柄なので（全巻一人による書写と判断される）、その可能性はなしとしないであろう。

六 和歌本文の問題（その2）

さて、和歌本文の視点からは、『草庵集』が『頓阿法師詠』との重複歌を持ち、その成立は『頓阿法師詠』のほかが『草庵集』に先行する関係で、現存の『草庵集』のうち、どの伝本が原初形態の本文を伝存しているかの問題が残されている。たとえば、高乗本の次の

A はれくもるさところかはれ神なつき空は時雨のふらぬまもなし

(時雨・六六五)

のAの詠の結句「ふらぬまもなし」の措辞は、第一類本・第四類本が「ふらぬ日もなし」、第二類本・第三類本が「たえぬころ哉」の措辞であるなか、唯一、高乗本のみが「ふらぬまもなし」の措辞を伝えて、『頓阿法師詠』の本文と符合している。この点、高乗本は原初形態の本文を持つ優秀な伝本であることを、いみじくも語っていると評しえよう。そこで稲田氏の作成になる『頓阿法師詠』と重なる詠歌を中心にして、原初形態の本文(原文・初編本文)であるか否かを表示した「第VI表」を借用して、それに高乗本のそれを添加したのが、次の(表4)である(次頁)。

この(表4)をみると、高乗本が原初形態の本文を伝えるかなり優秀な性格を持つ伝本である実態が一目瞭然、知られよう。すなわち、稲田氏の論考によれば、「第VI表」でみると、「◎や○の多い方が原本文(初編本文)」を伝えるということになり、「◎と○の合計の一番多いのは、版本の十五箇所、少ないのは、書C本の九箇所、他の伝本はその中間に位置する」なかで、高乗本は十六箇所、最多を数えるからである。ここに、高乗本の持つ優秀性を認めうるが、このことは高乗本の伝える識語の内容からいえるであろうか。

七 識語の問題

最後に、高乗本の識語の内容検討に入りたいと思う。高乗本の識語の内容については、書誌的概要のところ而言及したが、ここで改めて紹介することにした。

(表4)

『頓阿法師詠』との本文異同対象表

番 号	諸本・系統分類	
	本	類
48 45 42 39 37 33 31 30 28 26 24 22 18 17 16 14 13 11 7 6 5 4 2 1	承 本	一
○ ○ △ ○ ▽ △ ○ ○ ◎ ▽ ○ ○ ▽ ◎ △ ○ × ○ ○ ○ × ○ ○ ▽	静 本	四
/// /// /// /// /// /// /// ○ ◎ △ ○ ○ ○ ○ ○ × ○ ○ ▽	書 A 本	五
▽ ○ △ ○ ▽ △ /// /// /// /// /// /// /// /// ///	河 本	六
▽ ○ △ ○ ◎ △ /// /// /// /// /// /// /// /// ///	内 (松本) 本	一
▽ ▽ △ ○ ◎ △ ▽ ○ ◎ ◎ ◎ □ ○ ▽ △ × ○ ○ × ○ × ○ ○ ▽	東 奥 本	一
◎ ▽ △ ○ ◎ △ ○ ○ ◎ ◎ ◎ □ ○ ▽ △ ○ ○ ○ × ▽ ○ □ □ ▽	陽 A 本	二
▽ ▽ △ ○ ◎ △ ○ ○ ◎ ◎ ◎ □ ○ ▽ △ ○ ○ ▽ × ▽ ○ □ □ ▽	福 本	三
◎ ▽ △ ▽ ◎ △ ○ ○ ◎ ◎ ◎ □ ▽ ▽ △ ○ ○ ▽ × ▽ ○ □ □ ▽	書 B 本	四
/// /// /// /// /// /// /// ○ ▽ △ ○ ○ ○ × ▽ ○ □ □ ▽	都 B 上 本	五
◎ △ △ ○ ◎ △ ○ ▽ ▽ ◎ ▽ □ ○ ▽ △ ○ × ○ × ▽ ○ □ □ ▽	書 C 本	六
/// /// /// /// /// ○ ○ ◎ ◎ ◎ □ ▽ ▽ △ × ○ ○ × ○ ○ □ □ ▽	国 A 上 本	七
▽ ○ △ ○ ◎ △ /// ◎ ◎ / □ ○ ▽ △ ○ ○ ○ × ○ ○ □ □ ▽	東 京 本	八
◎ / △ ○ ◎ / ○ ◎ ◎ ◎ ○ ○ ◎ / ○ ○ ○ ○ ○ ○ / □ ◎	頓 阿 法 師 詠	
◎ ○ △ ○ ◎ △ ○ ○ ◎ ◎ ◎ ○ ○ ▽ △ ○ ○ ○ × ○ ○ ● □ ▽	高 乗 本	

(注) 高乗本の●は、第一類系に準ずる措辞。

近衛殿道一嗣 公御作（近衛殿御書）

竊視世（此）集之輯編可謂和歌之規範彰（顯）意／氣（なし）於萬象之中垂風躰於千載之後誠是／此道之遺美也豈不斯文（久）在茲乎不足嗟嘆／聯（斯）吟情（情性）而已

としへぬる和哥のうらみかけはそ

あつむる玉のかすつもるらん

ちなみに、（一）内の記述は承応二年版本の内容だが、高乗本と比較すると、多少の異同が指摘される。その点を明らかにするために、蛇足の感もあろうが、両伝本の訓読を、本間洋一氏の助けを借りて試みてみた。

近衛殿道一嗣 公御作

竊かに世の集の輯編を視るに、和歌の規範と謂ふべし。意気を萬象の中に彰はし、風躰を千載の後に垂る。誠に是れ此の道の遺美なり。豈に斯文茲に在らざらんや。嗟嘆するに足らず、聯か吟情するのみ。（高乗本）

近衛殿御書

竊かに此の集の輯編を視るに、和歌の規範と謂ふべし。意を萬象の中に顯はし、風躰を千載の後に垂る。誠に是れ此の道の遺美なり。豈に斯れ久しく茲に在らざらんや。嗟嘆するに足らず、斯に情性を吟ずるのみ。

（承応二年版本）

高乗本の識語の内容の特徴のうち、第一は承応二年版本（以下、版本と略称）などが「近衛殿御書」と記す識語

の作者を、「近衛殿道一嗣 公御作」と記している点であろう。ちなみに、近衛道嗣は正慶元年（一三三二）誕生、至徳四年（一三八七）三月十七日没、享年五十六歳。頼阿の死去に際して、「去（応安五年三月）十三日、頼阿法師他界云々、歌道数奇者也。年来所見来也。不便々々」（『愚管記』応安五年三月十八日の条）と記し、頼阿の死に哀悼の意を表した人物である。なお、『草庵集』の成立時期は延文四年（一三五九）の秋冬ころなので、この識語が記されたのは、道嗣二十六歳以後のこととなろうか。高乗本が「近衛殿」に「近衛道嗣」を想定しているこの記事は貴重な意義があろう。

その第二は、高乗本のほうが版本よりも記述が整備されていることである。第二文で、版本が「意」とする措辞を高乗本が「意気」として「風躰」に対応させたり、第四文で、版本が「斯久」として多少意味不詳になっているところを、高乗本が「斯文」として意味を明確化させている点に認められよう。なお、第五文で、版本が「斯」とするところを、高乗本が「聯」としているところにも、憶測すれば、作者の自然な意志表明が感じられるといえようか。

ただし、第一文で、版本が「此集」とするところを、高乗本が「世集」としている措辞については、版本のほうが適切な措辞となっていると考えられよう。なぜなら、「世集」では世間一般に流布している歌集の意味となり、『草庵集』を指さないことになって、まったく意味をなさないことになるからである。この点、高乗本は不備な措辞を伝えていると言わざるを得まい。

ここで、両者の先行関係に言及するならば、「世集」の措辞は、どのように解釈しても高乗本の書写段階での誤写と考慮されようから、版本系の伝本の伝える記述のほうが高乗本のそれに先行すると推測されよう。それは、高乗本の特徴としてあげた諸点も、版本の多少の粗野な表現・措辞を高乗本が少し手を加えて整備したと考慮すること、無理なく理解されるように思われるからである。

ちなみに、この識語を持つ伝本には、第三類本系の三本を除くと、第一類本の大半が該当する。したがって、識語の有無の視点から特定の伝本を想定することは無理である。

八 おわりに

以上、故高乗勲氏蔵の『草庵集』について、種々様々な視点から、主に伝本の性格に言及してきたが、こここれまで論述してきた要点を摘記して、本稿の一応の結論を提出してみたいと思う。

- (一) 収載歌の有無の視点からみると、高乗本は、第三類系第一種本「東奥義塾図書館本」・同八種本「東京大学総合図書館本」・同九種本「竜門文庫本」、および第一類系第四種本「静嘉堂文庫本」に近似する。
- (二) 和歌の配列の視点からみると、高乗本は、第一類系第四種本「静嘉堂文庫本」に近似する。
- (三) 詞書の視点からみると、高乗本は、第一類系第四種本「静嘉堂文庫本」および第二類系第一種本「国立公文書館内閣文庫本」に近似する。

- (四) 和歌の本文異同の視点からみると、高乗本は、上冊では第三類系第七種本「国立国会図書館本」・同第八種本「東京大学総合図書館本」に近似するが、下冊は第一類系第三種本「豊橋市立図書館本」に近似するという、同一伝本内で結論が異なっている。

- (五) 識語の有無の視点からみると、高乗本は、識語を持つ第一類系の大半と第三類系の三本と共通するが、その依拠した伝本を特定することは不可能である。

- (六) 『草庵集』に先行する『頓阿法師詠』収載歌との本文異同の視点からみると、高乗本は、『頓阿法師詠』と

重複する表現・借辞が現存する諸伝本のうち、もつとも多く認められる点で、原初形態の本文（原本文・初編本文）を伝える貴重な伝本と規定され、現時点では、無視できない価値ある伝本と位置づけられようか。

(七) 箱書に「堂上方御筆」とある人物を特定することはできないが、高乗本の書写年時を、室町最末期から江戸最初期と想定することは、以上の検討から容認されるのではなからうか。

なお、高乗本『草庵集』について、さらに検討を加えなければならない問題は、このほかにもいくつか存在するであろうが、基本的な問題についておおよその結論を出したいまは、それらの問題については今後の課題にすることとして、ここで一応、擱筆することにしたと思う。

ちなみに、高乗本『草庵集』は、『光華女子大学研究紀要』（第四十号）に翻刻を予定している。

〔付記〕

本稿を草するに際して、貴重な文献の閲覧および該本の写真撮影など、種々の面でお世話になった、故高乗勲氏のご令室・高乗三千枝氏に深謝申し上げる次第である。